

辺疆惑星

暗黒時代。渾沌の時代。

宇宙誕生から、約百億年。

地球もまだ、銀河になかった頃。

宇宙を支配する国家もなく、一つ一つの文明が成長し、消えて行く。

全く触れ合う事の無い、文明。知り合う事の無い、人間達。暗黒時代。渾沌の時代。

ザッ……。

砂の上を、歩く。

長いローヴをまとい、ゆっくりと歩く。

深いフードが、歩く度に、揺れ動く。

肩には、巨大な、グレートソード。

グフォオ!

頭上を、巨大な飛行機が、厳かに、轟音をたてて飛んでいく。

衝撃波が、空気を振動させ、強い風を起こす。

風は、ローヴを大きく靡かせた。

空を見上げる。

機体を目で追った。

青い、雲一つ無い空の中へ、機体は吸い込まれて行った。前へ向き直り、再び、歩き始める。

前方には、町が見える。

町は、一本の道しかなく、砂に半分埋もれた木造の建物が並んでいた。その町の向こうには、高層ビルの影が見える。十数km先だ。巨大な、メガロポリスだ。

先程の飛行機は、そこから飛んできたのだろう。

キィ……。

木製の扉が、ゆっくりと開かれた。

一人の男が、扉へ目を移した。

しかし、再び、自分がしていた事を思い出し、視線をもとへ戻した。

扉の影からは、ローヴをまとった長身の者が入って来た。

そして、建物の中を見渡した。

錆び付いた町の端にある、この酒場は、人が多いとは言えなかった。

全く無口のまま、カウンターの所に並んでいる、回転椅子の一つにつく。肩にかけてあった、巨大なグレートソードを、カウンターにたてかけた。

回転椅子は、非常に高かった。長身の、この者さえも、足を組めば、爪先さえ、床に付く事はなかった。

座って、落ちついてから、深く被っているフードを後ろへはね上げた。

桃色の髪の毛が、音も無く、背中へ垂れる。

二十歳か、その付近の女性であった。

前髪が、顔の殆どを隠し、見えるのは口元だけである。

彼女は、自分の前にいる酒場の主人を見上げた。

背の高い、屈強な男がそこにいる。太い腕と、沢山の傷跡は、彼の過去を語っていた。

「いつものものを……。」

女は、そう、彼に告げた。

無表情に、グラスをみがいでいた男は、その声を聞くと、顔を上げた。

「お客さん、また戻ってきたのかい。」

男はそう言って、後ろを向くと、棚の一番端から、酒瓶を一つ、取り出した。

女は、頬杖をついて、ふと、酒場の出入口を眺めた。

外を、時折通るトラックが、砂を巻き上げる。

その砂が、御座成りな木の扉の隙間を通って、店の中にまで入ってくる。

何度も、踏みつけられた、木の床。

壊れた椅子、………風が吹く度にさしむ、扉。

女は、何となく、懐かしさを感じた。

コト………。

静かに、グラスが、女の前に置かれた。

女は、それを確認すると、二本指でつまみ上げ、自分の視界の中に入れた。

そして、透明な緑色をした、液体を、明かりに、透かす。

「お客さん。友人は、いないんですかい？」

女と同じ酒を、手に持ち、男はそう言った。

女は、向き直り、男を見上げた。

「私に……友人ね。そんなものは、疾うの昔に失った。」

女は、小さく笑うと、グラスを口元へ持って行った。

「お客さんの、斜め後ろ。三クール後ろの女は誰です？最近毎日の様に來てるんだがね。」

男は、そう言って、グラスを持ったままの手で、女の後ろの方を指さした。

そして、グラスの酒を一気に飲み干すと、自分の作業を始めた。

「気付いているよ。」

女はそう言って、グラスを右手に持ったまま、立ち上がった。男は、ヤレヤレ、と言った表情をした。

「何か、私に用か？」

女は、円卓で、一人、酒を飲んでいる女の右隣に立った。

右手には、グラスを持ったままだ。

その女もまた、旅の者らしく、マントをはおり、フードを深く被っていた。その女は、先程カウンターにたてかけた大剣と同じものを、肩にかけていた。ただ、柄に嵌められている水晶の色だけが違う。

真っ黒なフードの中からは、鋭い視線だけが伝わってくる。

女は、フードを取り払い、素顔を見せた。

その表情には、薄笑いが浮かんでいた。

「Lasagna……。」

それを見た女は、小さく、そう呟いた。

「元氣そうね、Valina。」

ラスガと呼ばれた女は、顔を女に向けた。

「ま、座りなよ。」

ラスガは、そう言っつて、自分のお向かいの空いている椅子を指さした。

ヴァルアと呼ばれた女は、何の抵抗もなく座る。

そして、いつもの酒を、このテーブルに持って来るよう、酒場の主人に合図した。

暫くして、露出度の高い服を着た娘が、酒瓶を手にして、やってきた。

女は、娘が円卓の上に、酒を置くのを待ち、数枚の硬貨を、娘の掌へ、静かに置いてやった。

そして、いつしか空になったグラスに、酒を注ぐ。

透き通った緑色が、天井の照明の光に当たつて、綺麗な影を落とした。

「久しぶりだな、ラスガ。どうだ？ マルシア (MARSHIA) の消息は掴めたのか？ 『大移動』後、姿を消したままだ。」

ヴァルアは、静かに、ゆっくりと言つた。

「全然。全く、音沙汰無し。」

ラスガは、首を横に振つてみせた。

「……私の事なんか、聞いてもしようがないでしょう？ ヴァルアには全てお見通しなんだから。」

呆れたような表情をして、ラスガは、今までの会話について、後悔した。

「で、ヴァルア。あなた、ここで何やってるわけ？ 捜すのに、ものすごい苦労したわ。」

ラスガは、グラスを円卓に置いてから、ヴァルアを指さした。

「別に。旅を繰り返しているだけだ。この星は、部分的にしか発達していないし、人もいない。星の半分以上が、まだ、人入った事の無い世界だ。文明は可成高度なものにな。」

ヴァルアは、クイツとグラスを口元へ持つていく。

「何の為に。何の為にそんな旅をしているの？」

ラスガが、ヴァルアをにらんだ。

「特に、目的はない。敢て、こじつけるならば、私自身のためかな……。」

ヴァルアも、視線をラスガに合わせた。

「真逆、使命から逃げてるんじゃない……。」

ラスガが、上半身を乗り出す。

「真逆……それに、使命ではない。目的だ。」

ヴァルアは、ラスガから視線を外し、首を左右に振つた。

「同じ事ですよ。使命も、目的も。それで、これからどうするつもりなの？ 目的を放棄するの？」

ラスガは、落ち着きを取り戻し、再びグラスを手に握つた。

「ラスガ。私は人間というものに、愛想をつかした。私は、この世界をまとめる目的を持つ。確かに、この数十億年間、それに努めた。善への道を整え、罪を認識させ、人間から、悪を遠ざけた。人間は、それを理解し、その道を進んでく

れた。人間は、何が悪で、何が善なのか、解つたのだ。私の事を、直接知つた者は、善への道へ進んだ。だが、彼らの子孫は、そうではなかった。時が経つに連れ、人間は、悪の方へ向かつて行つた。勿論、彼らも、善と義との区別は出来るのだ。そして、彼らが悪のどん底に落ち、悪の恐ろしさを知つた時、彼らは、私の名を呼んだ。私は、彼らの呼びかけに答え、

再び善への道を整え、罪を認識させ、悪を遠ざける。しかし、再び彼らは、悪の道に向かってしまう。自分から望んでいるのか、誘惑に負けているのか……。

それから彼らは、また、私に助けを請う。

彼らは、自分で自分を守る事も出来ず、自分の生き方を定める事も出来ない。人間に、人間の支配を任せれば、私の造った秩序を破壊し、私が、一つ一つ面倒を見てやると、彼らは呟く。全く、厄介な生き物だ、人間はね。」

ヴァルアは、長い台詞を言い終えると、大きく溜息をついた。「それが、何回繰り返されたと思う?」

ヴァルアは、疲れたような口調で言った。

「知りたくないです、そんな事は。」

ラスガは、首を左右に振って見せると、酒を一気に飲み干した。

「でもね、ヴァルア。周りをよく見てご覧。」

ラスガは、グラスを円卓に置き、周りを見渡す。

ヴァルアも、それにつられた。

「大声で笑っている男の人達。あっちには、酔いつぶれている人もいる。娘のお尻を触ろうとしているヤツ、それから……。」

ラスガは、ヴァルアを見つめた。

「ヴァルアの旅の帰りをいつも待って、お酒を出してくれる、酒場の主人。この酒場の中だけでも、いろんな人達がいる。」

この際、どうです? 人間を見る目を変えて見るっていうのは。それに、ヴァルアがそういう気持ちになるのは、ヴァルアの中に、人間の心があるからでしょ? 私達は、人間じゃないんだもの。人間の心を持ってたら、人間を完全に支配するなんて、不

可能だよ。そんな事は、ヴァルアが一番知ってるはずですよ。」

ラスガは、ニッコリと笑った。

「フフ、フハハ……。」

ヴァルアは、声に出して笑うと、席を立った。

「何。別に目的を捨てたわけではない。私は私なりに行く。気にしなくていい。」

ヴァルアは、ラスガに背を向けたままそう言うと、カウンターの方へ戻って行った。

ラスガは、笑いを浮かべると、円卓の上に勘定を置いて、席を立った。

そして、軽く、酒場の主人に挨拶をすると、酒場を出て行った。

ラスガが、ここを訪れる事は、二度と無かった。

「彼女は、誰です?」

男、酒場の主人は、グラスをみがきながらそう言った。

「友人だよ。友人。」

俯いたまま、女、ヴァルアは答えた。

「そして、あなたも、私の、数少ない、友人だ。」

女はそう付け加えると、ニッコリと笑った。

「今回の旅の話、聞いてくれる?」

女は、顔を上げた。

「ええ、それが、私の楽しみですからね、お客さん。」

男も、ニッコリと笑った。

「そうか。」

女は、無邪気に笑うと、話し出した。
二人の顔は、幸せそうに見えた。

御座成りな木の扉の隙間から、風が入って来る。

外はもう暗くなってきた。

この町の向こうに見える、ビル郡からは、光が天に向かって
伸びていた……。

この町にも、夜が、来る……。

fade out……